2004年度授業改善研修参加レポート　　所属（経済学部）　氏名　新井野　洋一　印省略

「研修会等名称」
平成 16 年度メディア教育開発センター研修
教育コミュニケーションの基礎―身体関係からのアプローチ―
場所：メディア教育開発センター研究棟
期間：2004/12/10～12/12

１．研修の内容

日本語教育・英語教育など言語やリテラシーにかかわる領域において、要素技能だけでなく、身体性・全体性に着目したコミュニケーション力があらためて問われている。また、教員ー学生間のコミュニケーションの困難さがクローズアップされている今日、基底としての身体関係から自身や場を捉え直すことは、教育力向上への新たな手がかりにつながる。研修では、密度の濃い体験実習をふまえながら互いの身体や言葉を吟味し、コミュニケーション力の土台を築くことをめざした。how-to としてのコミュニケーション技能でなく、対人関係での基本的な相互作用に焦点をあてて、関わりや言葉の成り立ちを確かめた。

体験実習は、以下のとおりである。

第 1 日：テーマ：「身体体験・関係の色彩」

我々が棲み込んでいる最も身近な環境ともいうべき「からだ」、また我々を突き動かし関わりを現実化する、根源的な主体ともいうべき「からだ」に焦点づけて、関わりのなかでの重層的なありようをそのまま体験した。

第 2 日午前：テーマ：「ふれる・働きかけるの様々」

自他の関係様式が、知らずしらずのうちに場の構成力となっていることに気づき、あらためて「ふれるということ」「働きかけるということ」の直かの体験を通して、習慣化したやりとりを越えた、新たなあり方の可能性を探った。

第 2 日午後：テーマ：「聴くこと・話すことの実践」

当たり前になっている日常のコミュニケーション、とくに「聴くこと」「話すこと」がどのような体験として現象しているかを問い、「こえことば」の回復が拓く関係様式を手がかりに、教育コミュニケーションへのヒントを探った。

第 3 日：テーマ：「関わりのなかでの学び」

2 日目までの体験をあらためて振り返るとともに、「教える」「学ぶ」の成り立ちを身体関係から捉え直して、からだぐるみの教授学習論の視界と日常の教授活動への示唆を整理した。

参考資料として、「原初生命体としての人間」（野口三千三著、春秋社）および「DVD ブックアーカイブズ野口体操」（野口三千三・養老孟司・羽鳥操著、春秋社）が紹介された。

２．研修の成果

学生とのコミュニケーションを重視するという理念に止まらず、実際の授業において、学生に直接触れることの重要性を再確認できた。また、そのためには、教師自らが自分の体に気づく能力を持つことの大切さも学んだ。

特に、脱力という現象を体験することができたことが有意義だった。

我々は、「本心」で学生にぶつかるという表現をしがちだが、本来は、体と心の内側から響き出る「本音」が大切なのである。

３．授業への研修成果の反映状況

これまで以上に、楽な気持ちで学生に接することができるようになった。

体育実技のみならずクラブ活動の指導上で、自然な形でのコミュニケーションを意識した教授ができるようになった。

学 部 長	ＦＤ委員長	ＦＤ委員会	総合企画課長	係